

【会員だより】

大学院進学への勧め

広島市総合リハビリテーションセンター 村中 博幸(57 回生)

私は25年前、京都医療技術専門学校(現京都医療科学大学)を卒業しました。学生時代の友人とは今でも交流がありますが、当時は友達と良く遊び、勉強にはあまり興味がありませんでした。それでも運よく3年間で卒業し、地元の病院に就職しました。就職してからは先輩方にご指導をいただきながら無我夢中で撮像技術や医学知識の習得に努めました。3年もすると、ある程度一通り出来るようになり自分の撮影した画像に対し少しこだわり始めました。



そんなある日、私が撮影した血管造影の画像を見た放射線科医の一言で私に転機が訪れました。造影剤のコントラストが悪いので管電圧が高いのではないかと言われたのです。設定値は良かったのですが、実際に管電圧を測定してみると表示値よりも高くなっていました。自分の専門領域でありながら、対等に議論できない悔しさが今でも忘れられません。

他職種と対等にディスカッションするには知識も学歴も必要です。私も鈴鹿医療科学大学の科目等履修生として、働きながら一年間かけて単位を取得し、保健衛生学士を取得しました。本来、競馬のデータ分析を一晩中するほど、のめりこむ私の性格が高じて、それから更に上を目指すようになりました。ある宴会の席で偶然、広島国際大学の中村修先生(現在は日本医療科学大学教授)にお話したところ大学院への進学を勧められました。40歳になった私に続けられるか当初とても不安でしたが、研究を進めて行くうち次第に興味がわいてきました。私の研究のテーマは「MRI検査における体内金属インプラントのRF発熱」です。一年間も実験し、なかなか思うような結果が出ず何度も挫折しそうになりました。そんな時、先生から「研究とはそんなもの。いつも上手くいくとは限らない。あきらめるな」と言われ、2年目で徐々に成果が出始めました。結局、途中で止められず更に3年間の博士後期課程に進学しました。そして、今年3月に「医療工学博士」を取得しました。

この5年間の大学院教育で得たものは多く、研究への取り組み、論文の書き方だけではなく、今後の方向性を見出すことが出来ました。これからの診療放射線技師も医師と対等に議論し、よりレベルの高い医療を提供することが求められます。我々の使命は医療機器や装置の特性を十分理解し、医師が求める画像や情報を的確に提供すること。その際に必要な技術や知識を習得し、自信を持って医師に助言できるだけの力を持つことが必要だと思います。我々の存在価値はそこにあると私は思います。私自身まだまだ未熟ではありますが、これからも知識や技術を習得し、研鑽を積んでいこうと思います。

何より「研究はおもしろい」。素朴な疑問からスタートした大学院ですが、結果の出た時の喜びは最高です。今からでも遅くありません。働きながら勉強することは体力的にも金銭的にも大変だと思えますが、皆さん是非、大学院に挑戦してみてください。

以上

* 通巻 189 号 2008 年 10 月 10 日発行(H20 - No.3)より